

農林水産大臣賞受賞

～豊かな自然と伝統を次世代につなごう～

受賞者 ^{み ま き}御槇ふるさとづくり ^{かつどうすいしんきょう ぎ かい}活動推進協議会

所在地 ^{えひめけん うわ じ ま し つ し ま ち ょ う}愛媛県宇和島市津島町

代表者 ^{さきやま}崎山 ^{しげき}重喜

■ 地域の沿革と概要

宇和島市は愛媛県西南部に位置しており、平成 17 年 8 月に宇和島市・吉田町・三間町・津島町が合併して誕生し、面積は 469.58 km²、人口は約 7 万 7 千人である。

西は宇和海に面し、典型的なリアス式海岸が続き、東側の鬼ヶ城連峰は海まで迫る急傾斜を備え、起伏の多い複雑な地形をしている。海岸部の平野や内陸部の盆地に市街地や集落が点在し、河川の多くは宇和海へ流れる。

気候は、瀬戸内地区と太平洋沿岸地区の中間に位置して、年平均気温は 16～17℃で年間を通じて温暖である。

また、海岸部と山間部では気温や降水量の差がみられ、山間部では積雪や結氷もみられるさまざまな気候をあわせてもっている。

江戸時代に、伊達正宗の長男秀宗が入城し、伊達宇和島藩 10 万石の城下町として発展し、現存 12 天守に数えられる天守や仙台ルーツとする鹿踊り、牛鬼まつり、全国でも珍しい闘牛など、貴重な伝統・文化資源を有している。

産業では、豊かな自然を生かした一次産業が盛んで、特に水産業は、真珠やマダイ・ハマチ養殖などは、国内でもトップシェアを誇っている。農業では旧吉田町や沿岸部を中心に、かんきつ栽培が盛んで、宇和島市の農業産出額（H27

第 1 図 位置図



写真 1 御槇の田園風景

推計) 約 116 億円のうち果実が約 85 億円を占め、なかでもポンカンやブラッドオレンジの生産量は日本一を誇る。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

御槇地区は、宇和島市の南部にある旧津島町の北東部、標高約 250m に位置し、周囲を森林に囲まれた中山間地域である。昭和 30 年に御槇村から合併で津島町となり、その後平成 17 年に宇和島市となった。「御槇」という地区名は分立時の村名である御内と槇川を合わせた総称となっており、現在 12 の集落からなる。

宇和島市の中心部から御槇地区までの所要時間は車で約 50 分、地域内の公的施設としては公民館と小学校があり、バスは宇和島市の運営するコミュニティバスが 1 日 5 往復運行している。祓川温泉や霊峰篠山、サギソウの自生する源池公園など自然豊かな観光資源が多いのも特徴である。

横吹溪谷沿いの道路の先に広がる 1,000m 級の山に囲まれた田園風景は御槇地区の象徴であり、古くから冷涼な気候や豊かな自然など中山間地域の特徴を生かした水稻栽培や林業が主な産業であった。

しかしながら、農林業の担い手も減少し、戦後最大 1,800 人近くいた人口も、現在は約 350 人、高齢化率 53%と、宇和島市内でも過疎・高齢化が著しい地域となっている。

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	31.6% 総世帯数 177戸 総農家数 56戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 18戸 1種兼業農家 2戸 2種兼業農家 15戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 4,743ha 耕地面積 38ha 田 33ha 畑 2ha 樹園地 1ha 耕地率 0.8% 農家一戸当たり耕地面積 0.7ha

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

主要産業である農林業の衰退により担い手が不足し、耕作放棄地が増加するなど悪循環に陥っていた。また、平成 20 年に唯一の保育所が休園（22 年に廃園）されたことで、子育て世代の流出がさらに加速するなど、地域の活力がどんどん低下している状況であった。

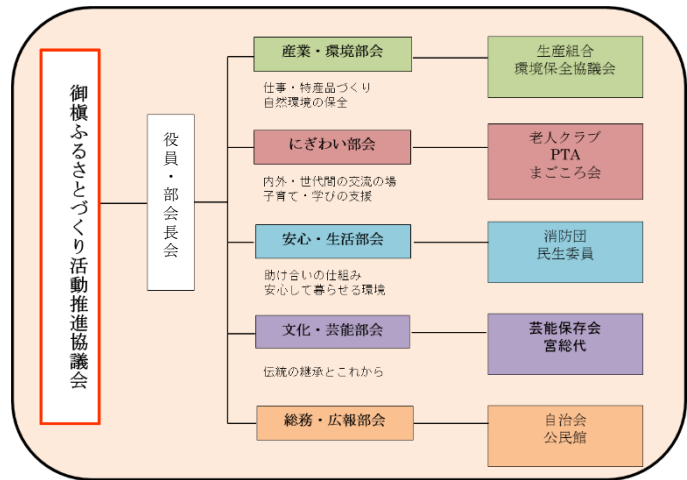
集落に危機感を感じていた住民たちは、御槇集落に広がる田園風景や温泉、また伝統芸能など豊富な資源を生かした地域おこしができないか模索していたところ、御槇地区が平成 21 年度から宇和島市が実施する「元気な集落づくり事業（以下「集落づくり事業」という。）」のモデル地区に選定され、地域活性化に向けた集落实態調査や方向性のとりまとめ等を行うため、その推進母体として、地域住民で構成する「御槇ふるさとづくり活

動推進協議会（以下「ふるさとづくり協議会」という。）」を立ち上げた。
 （２）むらづくりの推進体制

ア 集落づくり事業での取組内容

集落づくり事業は、愛媛大学をアドバイザー及びコーディネーターに迎え、平成 21 年度から 23 年度の 3 年間実施した。その推進母体となったふるさとづくり協議会には、5 つの部会があり、それぞれに老人クラブや PTA、消防団など関連の深い団体を位置づけ、住民全体で取り組める体制とした。

第 2 図 むらづくり推進体制図

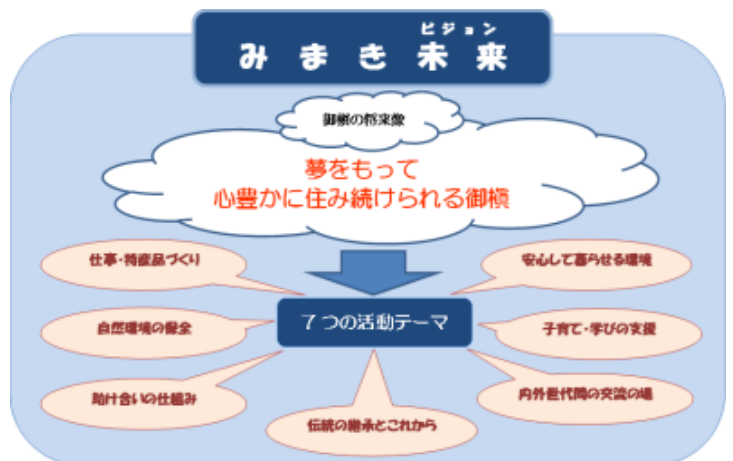


3 年間の活動では、御槇集落の将来像とそれを実現する活動計画を作るため、集落調査や、ワークショップ、先進事例調査等を実施した。特に最終年度には、愛媛大学のコーディネートにより、御槇の将来像や課題、その解決策など話し合うワークショップを 6 回開催し、平成 24 年 2 月に住民の意見を強く反映した将来ビジョン「みまき未来(ビジョン)」を策定した。

イ みまき未来の概要

「みまき未来」では、「夢をもって心豊かに住み続けられる御槇」を大きなテーマに、①内外・世代間の交流 ②仕事・特産品づくり ③伝統の継承とこれからなど、7 つの活動計画を設定し、補助事業等を活用しながら、それぞれの活動を展開した。

第 3 図 みまき未来（ビジョン）



この集落づくり事業の実施により、参加した住民が御槇集落の将来を自ら考える機運が醸成され、その後の主体的な活動につながった。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 「みまき未来」策定にあたっては、住民が中心となるよう意見の共有化に努め、それらを愛媛大学のコーディネートにより住民主体かつ一体感の

ある活動につなげることができた。

- (2) 旧保育所跡地を利用した「みまきガーデン」は、観光・交流面だけでなく、地域内の生活・福祉面にも大きな役割を果たすなど、集落の核となる施設であり、その幅広い活動は地域全体の活力向上にも大きな効果を与えている。

さらに、その整備・運営にあたっては、女性農業者組織を中心に住民主体の取組にこだわったことで、活動そのものが女性たちの生きがいにつながっている。

県内外のイベントにも積極的に出店するほか、平成 29 年からは、宇和島市中心部の空き店舗を借りて 2 週間に 1 回弁当販売を行うなど、集落外での積極的な販売・PR 活動を展開している。

- (3) ふるさとづくり協議会は、旧保育所の改修・整備や伝統芸能の保存、御槇米のブランド力向上など、ビジョンにもとづく集落づくりの初期の取組を一体的に行ってきた。現在は、「みまきガーデン」や「御槇米生産協議会」など新たな組織が既存組織と協調し、各組織が「夢をもって心豊かに住み続けられる御槇」を目指して連携し、人を引き付ける魅力的な地域を生み出してきた。

- (4) 御槇集落内には基本的に農業以外の働き口はなく、移住者のほとんどが集落外に働きに出ている。それにも関わらず、御槇集落への移住者が多いのは、田舎暮らしを求めている人にとって、御槇地区の豊かな自然、温泉、きれいな水などの環境的な条件に加えて、魅力的な観光資源や、住民の思いやりややさしさ等の人柄によるところも大きい。

- (5) ふるさとづくり協議会では、次のことを今後の課題としている。

- ・子育て支援が必要な世代の移住者が増え、その支援方策の検討
- ・移住者と住民とのコミュニケーションの強化を図り、互いに住みよい御槇を創成
- ・農林業の後継者対策の実施
- ・空家の有効利用や古民家再生など、移住者の受け皿を確保できるような仕組み作り

- (6) 行動計画を記したビジョンの策定から 6 年が経過したことから、新たな視点も加えたなかで、大学や公民館等の関係機関を巻き込んで、これまでのむらづくりを検証し、新たな課題を盛り込んだ新しいむらづくりに向けて検討する動きもあり、地域のさらなる活性化が期待できる。

2. 農業生産面における特徴

- (1) 水稻栽培の維持と「御槇米」のブランド力向上に向けて

御槇集落では、高齢化・担い手不足に対応するため、平成 12 年の圃場整備を機に、「御槇生産組合」を設立し、作業受託による水田活用、広域で防護柵の整備など、集落ぐるみでの水田の維持・荒廃防止に努めている。

平成 24 年 2 月に地域の農業者で「御槇米生産協議会（以下「生産協議会」という。）」を設立し、PR チラシの作成、HP の開設等の活動を展開し、ブランド力向上・販売促進に努めている。宇和島市のふるさと納税の返礼品にも選定され、販売量や知名度は徐々に向上しており、集落の基幹品目である米の振興を栽培面だけでなく販売面からも後押ししている。



写真 2 「御槇米」ブランド

（２）新たな品目へのチャレンジ

元地域おこし協力隊員が御槇地区で「えごま」栽培に成功し、「生搾りえごま油」として商品化され、みまきガーデンでの販売や宇和島市のふるさと納税返礼品に採用されるなど販売先が広がっている。

（３）集落イベント「御槇ふるさと市」の開催

これまで地域の女性グループ「まごころ会」が、地区内の倉庫で開催していた直売イベント「まごころ市」を、平成 23 年には地区全体で行うイベントに発展させ、「御槇ふるさと市」として開催した。

主催を御槇ふるさと市実行委員会に、場所を自然休養村管理センターに変更し、愛媛大学や民間企業等の協力（ボランティア）を得ながら、毎年、地域の産業イベントとして開催しており、地域や特産品 PR、消費者との交流の場として地区内外より多数の参加者が訪れている。



写真 3 御槇ふるさと市の様子

3. 生活・環境整備面における特徴

（１）旧保育所跡を改修し「みまきガーデン」を整備

平成 24～25 年度に旧保育所を改修し、平成 26 年 3 月に農家レストラン兼宿泊施設『みまきガーデン』が完成した。

みまきガーデンの整備・運営の中心は地域の女性グループ「まごこ

ろ会」で、以前から旧保育所の活用について構想はあったものの、多額な改修費などがネックとなり足踏みをしていたが、総務省の過疎集落等自立再生緊急対策事業を活用できたことで、施設整備の機運が盛り上がり、住民で何度も協議を重ね、満足する施設にする事ができた。

施設改修は、費用削減や施設への愛着をもってもらえることを目的に、地域住民や愛媛大学生、企業のボランティアの手で実施した。

(2) 観光・交流拠点「みまきガーデン」のオープン

平成 26 年 4 月にオープンした「みまきガーデン」では宿泊やランチの提供、各種イベントを開催し、集落内外から多数の人が訪れる施設となった。

そして、これまでは地域外へ発注していた仕出し弁当の注文も多数入っている。

宿泊施設は、家族旅行のほか、近くにある御槇小学校の土俵やプール、グラウンドを利用して、相撲部やスイミングスクールの合宿が行われている。宿泊には、集落内にある温泉施設「祓川温泉」の入浴券がセットになっているなど、集落内の魅力を満喫してもらえるよう工夫している。

また、いもたきや手芸づくりのワークショップ等のイベントの開催や、平成 30 年 3 月には、初めて結婚式会場として利用するなど新しい試みにもチャレンジしている。



写真 4 みまきガーデン

(3) 高齢者福祉サービスの充実

観光・交流拠点としてだけでなく、「みまきガーデン」では、平成 26 年 10 月から週に 1 回、20 名ほどの独居高齢者を対象に配食サービスも開始した。これは高齢者とのふれあいや見守りも兼ねており、生活・福祉支援の機能も果たしている。

(4) 伝統芸能の保存・継承

伝統芸能の保存を目的とした「御槇郷土芸能保存会」では、公民館と共同で、御槇集落の大きな魅力である「五つ鹿踊り」や「虫送り」「篠相撲」、「盆踊り」等、地域に伝わる伝統行事の保存・継承活動に努めている。



写真 5 五つ鹿踊りの様子

（５）他の観光資源との連携

集落内には、シーズンには１万人が訪れる観光芝桜の「山本牧場」、260年の歴史を持つ四国では珍しい硫黄泉の「祓川温泉」、明治40年に建てられた古民家よろず屋を復活した「福田百貨」、築100年の古民家でピザ・パン焼きを体験できる「石窯おこや」、また、川遊びのできる「出井の甌穴群」、アケボノツツジやシャクナゲが咲く「篠山」などの魅力的な観光資源がある。

みまきガーデンと共に、観光資源を面的につなげ、「みまきキャンドルナイト」などのイベントを開催し、御槇の魅力発信に向けた観光・PR活動を展開している。

また、地域内に宿泊施設・食事提供施設ができたことにより観光客の増加の効果もあった。



写真 6 みまきキャンドルナイト

（６）地域おこし協力隊の活躍

平成26年度からは地域おこし協力隊を積極的に受け入れている。すでに協力隊を退任した2名のうちの1名は、集落内に定住し移住につながる拠点としてのシェアハウスを経営、もう1名は就農し、集落内でえごま生産や生産組合のオペレーターとして活躍するほか、生産協議会の一員として「御槇米」の販売促進にも大きく関わっている。

現在も1名の協力隊が活動しており、「みまきガーデン」の運営や情報発信等、地域に密着した活動を行い、協力隊は産業面・生活面ともに地域を支える担い手として活躍が期待されている。

（７）移住者の増加へ

平成21年度の移住第1号から現在（H29.12）までの移住者数はIターン17戸43人、Uターン7戸14人と大幅に増加しており、年々減少していた人口は平成26年頃から横ばい傾向となり、現在も350人前後を維持している。

移住者の内訳も定年退職者から子ども連れの若い夫婦まで幅広く、移住者9戸で16人の子どもが増えたことで、統廃合の話もあった御槇小学校の児童数は、平成29年度に5人の新入生が入学し計8人に回復し、小学校の存続に向けた明るい材料となった。

未就学児童数も13人まで増加しており、地域コミュニティ全体の活性化につながっている。